

明治期地方生糸商の活動とその背景 ——岩手県気仙郡の中里家と伊東家を事例に——

環境・地域政策系地域変動と住民生活分野 佐藤 文吉

本研究は、養蚕が盛んであった旧仙台藩の仙北地帯のうち、岩手県気仙郡を中心に生糸や繭の売買にあたった地方商人の存在と役割を、明治中期以降から末期までにおける地域経済と村落社会の変化を視野にいれて明らかにしようとするものである。

日本蚕糸業史については、信州諏訪地方などの主要製糸業地を対象にした諸先学の研究が蓄積されているが、その周辺における地方市場の実態の多くはいまだ明らかにされていないのであって、特に養蚕農民と直接取引をおこない、流通に重要な地位を占めていた地方生糸商については、これまで十分な説明がなされてこなかった。

本論文では、気仙郡蚕糸業の歴史的な経緯を踏まえたうえで、中里家と伊東家という2つのタイプの商人を取り上げている。両家とも器械製糸との密接なかかわり合いのなかで営業を展開しているが、中里家は、村落共同体の分解過程において、村の親族や維新後に形成された勢力層を拠点として商品経済を進展させながら、組合製糸に依拠しつつ生糸商としての性格を強めており、一連の史料からその変遷過程を検討している。

また、伊東家は、かつての城下町で政治経済の中心地としてはやくから機能分化が進んでいた町場において、近代的な経営感覚のもとに地元や県外の営業製糸との幅広い取引をおこなっているが、養蚕農家の「組」から集荷した蚕糸類を多様なルートで流通させるなど、一種独特な一面をみせており、取引対象に注目しながら分析を試みている。

このように近接町村にありながら両家の経営手法は対照的であったが、ここで課題となるのは、気仙郡で展開された組合製糸と営業製糸の実体と生糸商との関係である。まず器械製糸の勃興した

要因を探るとともに、そこにいたるまでの村落の構成にまで立ち入って検討している。そのうえで群馬県・碓氷社と比較しながら、結論を導きだそうとしているが、これまで岩手県の組合製糸の嚆矢とされてきた中沢社においては、かなり商人的色彩が強く、これとは逆に、株式会社の形態をとってはいるが、営業製糸のほうからは碓氷社と同じような要素を内包していたことが読み取れるのである。ここから言えることは、中沢社は、信州、上州の折衷型のもとに商人を中心として運営され、営業製糸は養蚕農家が持ち寄った零細な資本によって経営されていたことによるものと推測することができよう。

ただ、ここで認識を誤ってならないのは、商人の性格はけっして利益の中間的な収奪ばかりにあったのではなく、すくなくとも気仙郡においては、蚕糸類の流通に商人が機能を発揮したからこそ、器械製糸が発展できたことに注目しなければならない。それを裏づけるために、ここでは破綻した個人器械製糸を一例として取り上げている。中沢社は曲がりなりにも50年近くものあいだ営業を続けたのにたいし、この製糸工場は、わずか5年で相場に翻弄され経営に行き詰っている。そこには、商人がかかわっておらず、横浜輸出市場の情報を掴めきれなかったことに起因するものとみて間違いなさであろう。

さらに、中里家は、信州製糸がアメリカ向け輸出に独占的支配力をみせはじめると、巧みに国用糸へと流通の方針を転換している。また、信州片倉製糸は東北の一生糸商にすぎない伊東家と明治30年代後半には取引をおこなっており、このことは地方生糸商の研究なくして日本蚕糸業史の全容解明に至らないことを物語るものと帰結することができるであろう。